

# 主の恵みの年

日本基督教団  
塚口教会  
〒661-0012  
尼崎市南塚口町  
2丁目34-3  
電話 06-6429-3019

## 主の恵みの年

ルカによる福音書 四章一四―三〇節

沖村裕史

「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した。」

今ここに実現したと言われる聖書の言葉は、預言者イザヤの言葉です。イザヤは、この世界の中で見捨てられている人々、差別をされている人々、抑圧されている人々が解放される、という喜ばしい福音を語っています。そして、そのような人々の自由の回復が、苦しみからの解放が、今ここで実現している、現実のものとなっている、とイエスは言われます。さらに「主の恵みの年を告げるため」という言葉を最後に付け加えることによってイエスは、この喜びの知らせをより高らかに、より力強く人々に宣言し、印象付けようとしています。

「主の恵みの年」とは、レビ記二五章に記される、ヨベルの年のこと。五〇年目の年に、イスラエルのあらゆる土地は、イスラエルがその土地を取得したときに家々に割り当てられた、元の割り当てに戻されると定められていました。この定めは、すべては神からの賜物であり、神のものであるという信仰に基づくものです。いわばヨベルの年は、新しくされた世代の人々が、新しいスタートを再び切って、苦難と重荷から解放され、喜びと自由をもって新たに生き直す

ためのものでした。

しかしナザレの人々は、この言葉―イエスの福音を聞いてもピンと来ません。ただ感心をするだけです。そしてそれは、私たちも同じかもしれません。この世界に、そのような不条理としか言い得ない状況の中に置かれた、まさに圧迫され、いのちの危機にある多くの人々がいることを、私たちは見過ごしにし、忘れ去ってはいないでしょうか。そうでないとしても、私たちがイエスの福音を現実の出来事として聞こうとするとき、この世の悲惨、不条理は本当になくなるのでしょうか。そうはならないでしょう。では、この福音を現実の出来事として受け取るということに、どんな意味があるのでしょうか。

高橋三郎が、「悲しむ者」と題する一文を残しています。「この世の営みに巻きこまれて、しみじみと胸に抱く思いは、悲しみでいかにしばしば、憤激に耐えない偽りや残酷な行為が、この世に横行していることであるか。…しかしイエスは言い給うた。『悲しんでいる人たちは、さいわいである。彼らは慰められるであろう』と。この言葉は、やるせない嘆きと憤りの中にある者にとつては、冷やかな傍観者の声、さとりすました者の教訓としか聞えないことが、あるかも知れない。しかしイエスの真意は、もちろんそうではなかった。十字架の上に血を流してまでも、われらの救いを全うしよう

とされた方の御言葉が、冷たい傍観者の声であろう筈がない。…十字架の主を静かに仰ぐとき、われわれは我が身にふりかかったすべての苦難、すべての理不尽な取扱いの背後に、見えざる神の御手を感ずることができはすまいか。そして、その神の御旨は善と愛そのものであることを、信じていることができはすまいか。…かくして天を仰ぐわれわれの心に聖霊が注がれるとき憤激に燃えていた心の怒りは融けて、われわれは『悲しむ者』となる。…不可解きわまる神の御心の前にわが首を垂れ、一切の反抗を放棄して、与えられた杯を飲み乾すとき、怒りは悲しみに変わるのである。そしてこの悲しみの中に、イエスの慰めが雨のようにしみ渡る。彼もまた悲しみの人であった。…不条理渦まく世にあつて、イエスはイザヤの言葉によつて、今ここに御言葉が成就する、という驚くべき喜びの知らせを告げ知らせます。すべての人がその罪と苦しみから贖い出され、喜びへと招かれていることを告げる言葉です。誰もが、悲惨と不条理の中で、憤りつつ、うめきつつ、悲しみの涙を流しつつ、であればこそ、この福音の希望に生きる者とされます。

それなのにナザレの人々は互いに、「この人はヨセフの子ではないか」と言い募るばかりです。彼らは、イエスが自分たちの仲間の人であることと主張し、彼が告げる新しい福音の言葉を聞くことと得意満面になり、自分たちの権利を主張し始めていました。同郷ゆえに、その救いの業に与かる特権が自分たちにはあると考え、その恵みを自分たちだけのものにしてしようと願っています。

そんな罪の姿を見つめつつ、イエスは、抑圧されている者が解放される福音とは一体どのようなものなのか、旧約聖書から二つの例をあげて教え諭されます。それは、

神の民であるはずのユダヤ人ではなく、蔑まれていた異邦人をこそ、神は選ばれ、苦しみから解放されたという出来事です。自分たちの願いが拒絶されていると悟ったナザレの人々は、高橋の言う、激しい怒りにとらわれます。そして一斉に立ち上がった、イエスを非難し始めます。そればかりか、罪人を人民裁判にかけて殺す死刑場であった、ナザレの高い崖のところにイエスを連れて行き、殺そうとさえます。この延長線上に、あの十字架の出来事があります。そして、この私たちも、気付いてか気付かぬうちに別として、しばしばこれと同じ罪を犯します。

であればこそ、もうひとつの言葉に注目しなければなりません。「福音を告げ知らせる」と訳されている言葉です。この動詞がここでは中動態の語形で記されています。中動態とは、自分の動作が相手を経由して自分に返ってくる、その動作が自分と相手の相互に作用しあうといった、双方向的な動詞の様態を表すものです。つまりイエスの福音は一方的に教えられたり、伝えられたり、ましてや押しつけられたりするものではなく、伝える者と伝えられる者の間で相互に作用し、分かち合われるものだということです。今、ナザレの人々はイエスの福音を独占しようとする者には本当には福音はもたらされず、独占しようとした途端に、その喜ばしい知らせは福音ではなくなってしまう。分かち合われて初めて、主の恵みの年として宣言されたイエスの福音は、本当に喜ばしいものとして、私たちの只中に生きて働くものとなります。現実の出来事となるのです。それこそが、ルカの語る、福音の出来事です。

(二〇一七年九月三日、振起日総員礼拝)